を要するものなれば、苟くも、日々に要する生計の上に、十分の節約を爲さんとするの士は、其衣食住に要するの費用は、よし面倒たりとも、一々現金を以て支拂ひ、かりにも浪費に陷ゐらざるやう注意するが專一なり、

第七、小遣帳は一々明細に記載せざるべからず

例へ一錢の物品にも、現金支拂を要すると共に、尤も注意すべきは、日々に要する小遣帳の記載方なり、何となればこの小遣帳の記載なるものは、一は一家の收支を計算する上に就いて必要欠ぐべからざる事にして、一は節儉を行ふ間接の方便なり、何となれば、日々に要する些少の費用をもこれを小遣帳に明記し、偖て、これを一週間、或は半月一月に總計するときは、實に豫想外の費用に達せるを見るなり、實に人間の精神なるものは、筆紙にも盡し難きほど不思議なるものにて、塵も積れば山となる、多額の費用を見る時には、始めて目覺めたる如く、今更のやうに打ち驚き、幾度となく其帳薄を繰返して、何故に、此樣に多額の費用を要したるやの疑問を起すものなり、其疑問一度心中に起る時には、再たび其帳簿を繰返へして、浪費なるもの〻有無を點檢して、知らず〳〵の間に、節儉の秘訣を自得するに至るものなれば、一家の生計を司るものは、吳々も小遣帳の記入を怠るべからざるなり、

第八　買物を爲さんとする時は必らず二度考ふべし

凡て物品を購求せんと欲するには、必らず二度考ふべし、二度考ふると云ふ事は、一見愚に似たれども、大に節儉する上に就ては必要なる事なり、何となれば、今買はんと欲するものにても、再び考ふる時には不用となる事あり、又、

前後の考もなく、欲するまゝに買取るときには、ツイ高價なるものをも無理に買取らざるべからず、然るを二度考へ直す時には、多少廉價にも買取らるゝものなり、されば、家事に要する物品を買入るゝには、可及的、急がずして、二度も三度も考へ直し、而して後に買取るべし、これ大に注意すべきことなり、

以上掲げたるもの、これを生計上に於ける注意の一班とす、元より注意すべきことは、他に數多なきにあらねども、多くは右に掲げたるものより、割出されたるものなれば、苟くも業の商たると、工たるとに論なく、事物を節約して財を蓄へ事あるの時に供せんと欲するものは、其本職の上に就て注意すると同時に、吾人が日々に消費する所の雜費を十分に節約し、假りにも浪費と名くる所のものは、之を避け、而して吝嗇に陥ねらざるやう注意すべきなり、

第十五　結論

余は章を結ぶに當り茲に、本編の卷首に載せたる金言を再びせんと欲す、

大に戰はんと欲するものは、大に食はざるべからず、大に食はんと欲するものは、又大に貯へざるべからずと

然り、大に戰はんと願するものは、大に食はざるべからざるなり、大に食はんと欲するものは、大に貯へざるべからざるなり、されど、卷首に於て論じたる如く、貯ふるをのみ大目的として、猥りに貪婪飽くなきは、又大に戒しめざるべからざるなり、何となれば、財を蓄ふるの方法を以てせずして、財を蓄へんと欲する時には、勢ひ岐路に入らざるべからざるなり、

之れを實例に照すに、財を蓄ふるの方法を講ぜず、又は其手段に據らずして財を蓄ふるの人は、必らずや、人の爲すべからざることを爲さでは叶はぬなり、何となれば、財を蓄ふるの一時は、世間万事の中に就て尤困難なる事業なり、故に、他の事業に比して、一層難かしき方法と手段を要するなり、然るに、其方法、其手段にも依らずして財を蓄へんとする時は、勢ひ人の金品を掠奪するに等しき狡猾手段を用ゐるか、或は、食ふべきものをも食はず、着るべきものをも着ずして万人より吝嗇漢なりとの譏を受くるか、但しは過誤の功名、換言すれば、まぐれ當りなるものに因らずんば能はざるなり然れども、「このまぐれ當りなるものは、」到底、企つべからざるものにして、こは所謂例外なるものとせば、如何せん、吝嗇と狡猾の二手段あれども、假にも新日本の壇上に名を擧げ

んとするもの、吝嗇と呼ばれ、狡猾と譏られて迄も財を蓄ふるは、決して人間としての本意にあらざるべし、されば、如何に考ふるも財を蓄へんと欲するものは、本篇に記す所の條目を熟讀して、大に之れを味ひ、而して後に之れが實行を勉めざるべからざるなり、

而して今一つ云ふべきは、金を貯ふるに必要なる性能なり、事体、金を儲け、金を貯ふることは非常なる難事なれども、決して大なる智識を要する譯にもあらねば、又人十人に勝れたる藝能を要するものにもあらず、何となれば、學問ありと金の蓄へらるゝものにあらず、又、一藝に堪能なりとて、金の儲かると決定せず、然れども財を蓄へんとするものは世の中にありとあらゆる万事を心得居らざるべからざるなり、さなくては、金は儲からぬなり、金は貯へられぬなり、諺に

万能に達して一藝に通せずといふことあれども、金を儲ける
には、一藝に精通せずとも、万藝に達するが第一なり、一の
學問を專問に研究せずとも、普通の學問だに心得居らば、そ
れにて事足りるなり、約言すれば、世渡りの巧者なる人こそ
財を蓄ふるの人なれ、

次には、決斷が第一なり、兎角何事をするにも慾圖〳〵する
は、金を儲くるの妨害なり、試みに、古來財を蓄へたるの人
を見るに、多くは決斷に速かなるの人なり、何となれば、こ
れ決斷なる性狀は、成功したる時にも、失敗したる時にも應
用し得らるゝものなり、之れに反して決斷なきの人は、孰れ
の場合にも、決斷あるの人に比して、成功する時には、大な
る益をとらず、失敗する時には小なる損にて止まらざるなり
例へば、今眼前に利益ある事の横はれるとせんに、決斷ある
の人は、一秒一刻を爭ッて、其機會に乘ずるも、決斷なきの
人は、徒らに思案にのみ暮るゝが故に、折角の機會を水の泡
と消し了るなり、又、今或事業に從事して失敗したりとせん
に、決斷あるの人は、其事業の到底損失なることを悟るや、
直ちに之れを放擲して、他の事業に從事すれども決斷なきの
人は、左思右考、思案にのみ暮れ果てゝ、萬に一、其損失の
利益に變ずる事もやと、頼みなき事を頼みにして、却ッて損
を大きくするなり、されば損益何れにしても、財を蓄へんと
欲するものは、必らず決斷の心なくては叶はざるなり、
されば、普通人世に必要なる所の藝能と、學術を備ふること
は、大に金を儲くる爲に必要なる性質にして、而して又決斷
の性狀は、其益する時には之れを大にし、損する時には、こ
れを小とするの、有益なる一手段なることを記憶し置かざる

べからざるなり、

以上、約二百頁の紙上は、何れも内地雑居後に於ける、新商人たらんものが、尤服膺すべきの條項なれば、世の金を儲けんと欲するものは、即ちこれを座右の銘として、本篇論する所の條項を金科玉條とし、而して其實行に勉めざるべからざるなり。

實業立志要訣 終

實業立志要訣

附錄立志編

緒論

指を屈すれば開國以來幾千年、今や固陋頑迷なる舊日本去て、第二十世紀の新日本來る、國や往時の國ならず、而して人獨り往時の人たり、されど十九世紀に於る驚くべき科學の進歩は、文學工藝の上に一大革新を來し、文學者工業家の頭腦を新にしたれども、獨り商人に至ては、尚舊來の陋習を脱せず、徒に店頭錙銖の利を爭をのみ商業の要旨と思料す、吁、何ぞ其心事の陋にして、時勢を見の明なきや。剖目せよ、今や內地雜居實施せられ、往時東洋の一孤島として、世界文明史の末端をだに汚さゞりし、我帝國も、

名譽ある戰勝國として、地の利を得る最近の文明國として東亞の主宰者として、歐米列强と肩を並べ、膝を交へ、新世界の一方に割據し、大に其雌雄を決せんとする時に非や而して其雌雄の依て決する所の者は、政治の如何によるや學藝の進歩如何によるや、但し又軍備の整不整に因るや。砲煙天に漲り、屍骸地に横はるの時は、雌雄の決する所は、兵の强弱にあり、されど大空に塵迷はさる太平の今日に在て、世界の一方に雄視せんとするには、果して如何、敢て喋々を須ずとも、一國の富を增進するの外、恐らくは他に途なけん、吁、商業は平和の戰爭なり、而して商人たるものは、實に一國の富を作成し、國をして富しむるの大原動力たるなり、今後商人の責任は何ぞそれ重且大なるや。されば こそ、往時は素町人として、奢侈度に過れば、忽ち

にして欠所を言渡れ、言一度無禮に亘ば、大刀に反を打して、眞二つにされしにも拘らず、今や商工業者優待の議朝野に起て、一國參政の政治家と相伍し、富國の原動力なりと尊重せらる、商人たるもの姑息因循、只、己を利するのみ力めて、國家百年の大計を思はずして可ならんや。然ども、商人や、他の學者技術家と大に其趣を異にするものなれば、經濟學を專攻し、高等商業學校を卒業したればとて、敢て足りと云べからず、何となれば、商業は、學術を其儘應用する者にあらずして、商業學は只其補助たるに過ぎればなり、然るに輓近に於ける商業學校の卒業生等は往々此義を誤て學校の卒業證書を公債の如くに心得、机上の空論を其儘實地に應用せんと欲す、故に、學に偏する者は、却て業に疎く、業に偏するものは、大世界の大勢を觀

るの明なく、前者は國の爲に益するあらんことを期すれども損失交々到り、後者は營業上の利益尠からずと雖も、只自己を利すれば足りとなす、而して今日の我日本や、前者後者の集合せるものにして、未だ中庸を得たる、完全なる商人とてはあらざるなり、吁々商人たるものも亦難いかな。左に章を逐ふて論ずる所の者、孰れも新日本の商家にならんものが、常に胸中に記して忘るべからざるもの、而して其守るに難きは、其利する所大なるが所以なるを知れ。

●商家の家庭

人の家庭に於ける、草木の土地に於けるが如し、家庭宜しきを得ずば、爭で高才逸足の士を出すべけむや、然れども其家庭や孰れも一ならず、曰く武士的、曰く商人的曰く科學的等ありて、一概にこれを論ずること難しと雖も、其大要は、小兒をして堅忍不拔の精神を養成せしむるの手段ぞ第一ならめ故に、賢婦のする處、必らず麒麟兒生る、而して商家の家庭の如きは、一層の注意を要するものなり、何となれば、商業なるものは、法律家が辯護士となり、裁判官となりて、其修得したる法律學を應用するの比にあらずして、學術以外に一の商業的智識――即ち臨機應變の權謀なるものを要するものなれば、若し、其家庭にして宜ろしきを得ず、涵養されたる精神不良なれば、隨て其爲す所、詐僞瞞着の手段を用ゐ、あはれ、文明國の大商人をして、社會の許さゞる惡人に任せしむるなど、往々實驗に徵せらるゝ所なり、其他、事業を爲すに當つて因循なる、國を思ふの觀念なき、自利をのみ主として他を省みざるなどあらゆる、惡性は、果して那邊より生ずるものぞ、元より境遇により性格の變ずるものありと雖も、多

くは、家庭の教育宜しきを得ざるに因せずんばあらず、されば、新商人たらんもの、須く此消息を解して、家庭の重んずべきを知れ。

●岩崎彌太郎氏の家庭

三井、三菱といはゞ三歳の小童も能く其英名を知る、而して三菱の本家岩崎彌太郎氏が、社會に頭角を顯はし、新日本の大商人として、一方に雄視したるは、元より彌太郎が非凡の英傑たりしに由るとは云へ、實に彌太郎氏の實母小野みわ子の指導宜しきに因せずんばあらざるなり、されば こそ、三菱の家風として、一般の人士に傾聽せられ、英士雲の如き幾千の社員がみわ子を稱して活佛の如く崇拜する所以なりとす、

今、彌太郎氏の實母みわ子が家庭の一班を聞くに、みわ子

は土佐安藝郡の醫師小野氏の女にして、夙に賢女を以て鄕黨に知らる、長じて岩崎彌二郎氏(彌太郎氏の父)に嫁したるも家政裕ならず、加ふるに夫彌二郎氏酒癖ありて、時にみわ子が胸中に涙を灑ぐの時ありしも、みわ子は能く其間に處して淑德を具へ、巧に一家の經濟を整理し、彌太郎氏以下四人の子を鞠育するに鋭意心を潛め、大事を怖れず、小事を苟もせず、意を用ゐて各自の特長を發展せしむるに努め、濫りに拘束することを爲さず、殊に、其彌太郎氏に對するや、當初より其凡に秀でたるを知るの故を以て、幼時の惡作戲甚しきを見るも、英才の萌芽を挫かんことを怖れて、少しもこれを叱せず、巧に其性狀を操つて、養育に力めたりしかば、天性の英才は次第に頭を上げて、先づ土州の儒牧周平門下の三人男に數へられ、又藩黌敎授館の四神

音を以て唄はれ、進むで土佐の四傑に數へられしも、蓋しみわ子の家庭其宜しきを得たるの功に歸せずんばあらず。

又、彌太郎氏始め儒を志し、後に天下の志士となり、藩侯尊王倒幕の主義を唱へて人才を徵すに當り、事意の如くならず、職を辭して家に皈るや、みわ子勵聲一番彌太郎氏を叱して曰く

汝、事に耐ずして數々業を廢す、ア、汝の如き輩遂に何事を爲し得ん、

と、この金玉の一言は、終に彌太郎氏をして感奮せしめ、堅忍不拔、以て三菱の盛業を起さしめたるなり

●安田善次郎氏の家庭

大橋乙羽子、嘗て太陽紙上に帝國の銀行王たる、安田善次郎氏の家庭を說いて曰く、

安田家の資產から云へば、千兩箱を赤煉瓦の代に積み重ねて宏壯なる西洋館も成らうし、大判を敷石にし、小粒を小砂利に敷き詰めて、庭園を飾ることが出來やうものを、實際その家に就いて、その家庭の有樣を見ると、奢侈といふものは、微塵も認め得ることは出來ないのである、大川の邊に巍然として建てる西洋館は、少しも輕俘な粧飾がなくつて、たゞ堅牢を旨としたるものらしく、大門を入り、黑き小門を入りて、玄關にかゝれば、煤塗の格子戸が、雜巾の目の目立つまで、奇麗に拭つてあつて、何處となく古風な點が見える。（中略）

その家庭の圓滿なること、子女敎養の周到なること、そして今夫人の、本を守り、昔を忘れずして、質素勤儉を旨とせらるゝこと等を知り、一層安田氏夫妻の高風を欽慕する

の念を高めた。

勤儉は人の美德、この二字、大にしては國を興し、小にしては家を富ましむるの基である、古往今來國家の衰ふるは多くは國費增進の四字あることを思へば、吾も人も寒心すべきは奢侈の一事である、而して安田翁の質素と勤勉との美德、これを何に譬へんか(下略)

岩崎、安田兩家の家庭は右の如し、借問す世間幾多の商人諸子の家庭は果して如何、

●商人の記臆すべき幾多の事蹟

商人の家庭は、封建の時代に於ては、輕々看過せられたるなり、されど、新世紀文運の潮流と共に、其必要は認められ、商人の責務の重大なると共に、敏腕なる新商人を出す所の家庭は、如何に注意すべきかは前項既にこれを論じ、尙、其參考として安田、岩崎二家の家庭を示せり、而して其寬嚴法を超ねざる家庭に育成せられたる後、商人は如何なる方針を以て、新世界の壇上に富の輸贏を決すべきか、元より其方法一にして足らずと雖も、左に列記する富家豪商等が經歷のある所を通覽し、其意のある所を玩味せば、蓋し益する所尠少にあらざるべし。

第一 三井家

日本の二大富豪として經濟界に對峙し、其勢力信用共に兩雄割據の觀あるものは三井、三菱の兩家である、が、三菱は明治の時代に新興せるもので、三井家は、大阪の鴻池家酒田の本間家と共に、日本富豪の大名家である、故に、資產は兎も角も、名家といふ點に於て、三井は三菱より一歩上に居るので、

されど、三井家は岩崎の妙に單一なる一家でない、其實は十一家の集合体である、即ち三井家中興の祖たる三井高利から分かれて、今日迄連綿として居るもの八家、總領家三井八郎右衛門、次男家三井元之助、三男家三井源左衛門、四男家三井高保、九男家三井八郎次郎、十男家三井三郎助と、別に三連家と稱する三井復太郎、三井守之助、幷に近代に至つて、三井武之助、三井得左衛門を合せて、總計十一家の集合團体で、世人所謂三井家なるものを組織して居るのである、而して三井家の社會に對する勢力と信用は、十一家の各主人が個人的勢力、個人的の信用ではなくつて三井家と稱する一名家の信用と勢力である、

而して、其十一家の主人は、各自一家の財産を有し、一戸主たるの權利義務を負ふて居る、が、家制の上から觀察すると、三井の十一家は、純粋なる獨立の一家を成して居るとは云へない、何故かといふに、彼等十一家は皆自分の所有の財産を擧げて、元方(卽ち總領家なる三井八郎右衛門男の管理に托し、生計の費用も、乃至事業の資本も、皆元方から之れを支出して貰ふので、一厘一毛も自分の自由には行はれないやうに出來て居るのである、

三井家中興の祖三井高利、曾て諸子に諭した、其言に「孤ないれば保ち難し、協力同心以て三井家を守るべし」と、誠に千古の金言である、故に高利の嗣子高平、父の遺訓を基礎として始めて家德式目といふものを定めた、尤、三井家の家德式目といふは、如何なる條目から成立つて居るかは解らないが、兎に角、高利の遺訓を奉じたとあらば、協力同心といふ大原理から割出した家族制度に違ひない、實にこの

協力同心なる四字は、他に幾多の富豪名家あるにも拘はらず、三井家をして嶄然頭角を現はさしめた所因である。故に、其業務の廣大なることに至つては、現時我帝國に於ける事業家、富豪の中に於て、先づ三井家を最大なるものとしなければならん、今試みに之れを記さんに

第一、三井銀行（三井八郎右衛門、三井元之助、三井高保、三井八郎次郎、三井守之助）

第二、三井物産會社（三井武之助、三井養之助、三井元之助）

第三、三井呉服店（三井得右衛門、三井復太郎、三井源右衛門）

第四、三井地所部（三井復太郎）

第五、三井事業部（三井武之助）

以上は即ち、三井家の事業である、而して其規模設備の廣大なることは、宛然たる一個の政府といふも過言ではあるまい、要するに、三井家が斯の如く強大なる勢力を社會に有するも、其基因を尋ねれば、中興の祖高利の遺訓たる「協力同心」の四字に過ぎないので、例へ幾百万の資本を運用しても、同心協力の實が擧らなかつたならば、この廣大なる事業を經營して、斯く迄の信用と、勢力を有することは出來ないのである。

讀者、以上の記事を讀むで幸に考思せよ、掌に等しき土地に齷齪として、富を世界に競はんとする念なきの商人は更に云はず、苟くも、新世紀の商人として、小にしては名を海の内外に揚げ、大にしては、國家富强の基礎を固めんと欲するものは、協力同心なる四字の、如何に大勢力を有するかを忘る

べからざるなり、

第二　三井銀行の盛大なる所因

同族の合名銀行中、我國の第一流を以て許されたる三井銀行が、何故に斯迄世人に信用があるかといふに、其營業種目は、別に他の銀行と差違ある點はないが、其取引の廣大なることは、世人をして便益を感せしめ、信用を博するの一因である、實に三井銀行の規模の廣大なることは、日本銀行を除いて、他に此れと頡頏するものはない位である、而して、今日の盛大を致した最大原因なるものは、之れを組織せる社員は皆三井家の主人であつて、其第三者に對する責任が無限であるから、隨て世人は一も二もなく、三井銀行ならばと云つて安神する、即ち信用するので、而して其信用なるものは、其事業をして、益〻盛大ならしむるのである、實に信用の商業に於ける、恰も頭腦の人體に於けるやうなものだ。

吁！信用の無形の財産なり、新商人たらんとするもの信用の点に眼を注ぐなくむば、恐らくは、百萬の資金も一塊の泥土と擯ぶならんか。

第三　堀越角次郎氏

「金を貯めても其金を殺して了ふものがある」とは、或人が同氏を評した皮肉的文字である、全体、堀越といふ、立つと孔夫子の仰せられた三十の頃迄は、殆んど素行の治まらない破落戸風の人であつたが、一朝精神を改め、東京に上つて、終には堀越と云へば、一時東都屈指の豪商と人に許されて居た、が、此人は生涯帳場格子の中で、以て死ぬる迄算盤を離さなかつた、其位であるから格別飛離れた事業に

手も出さなければ、これといふ愉快なことも得しない、只自己一生、金錢を遺したといふに止まつて、而して堀越氏の死後、其貯蓄せられた金錢は、何うなつたかといふに、孫の代で死絶えて了つて、今では堀越角次郎なる名さへ記憶して居る人はない位である、すると、約り堀越氏の苦心なるものは金を貯めて、孫の代で死絶えて無くなつたといふ丈の事で、何の功蹟も擧らない、これは何故かといふに約り堀越角次郎其人は、金錢の貯へることを知つて、金錢を散ずることを知らない、複言すると、金を費ふことを知らない、が、日本舊來の商人とは、斯如人物が澤山多い、即ち、此等の人が「金を貯めても、其金を殺して了ふ人である」

誠に商人たるもの眷々服膺すべきの事にあらずや、元より金

錢を貯ふることは難しと雖も、金錢を散ずることは、貯ふるよりも尚ほ難きことを忘るべからず、若し吾人をして、一歩を進むで極言せしむれば、散せざるの金錢ならば、貯へざるの勝れるに如かざるなり、古諺云ふあり、財寶の持腐り、と、商人諸子宜しく三省すべし、

第四　五代友厚氏

堀越氏と相對して「金を儲けても、其金子を腐らして了ふのは五代友厚である」とは、或人が五代氏を罵倒したのである、尤、五代氏は明治の初年に於ける、知名なる素封家であつて、其全盛時代には、空飛ぶ鳥も落るやうな勢で、而して大阪から東京へでも行くといふ時には、恰ど大名のお上りと相伯仲する程の威勢もあり、友厚其人の實力に至つては老南州でも大久保翁でも、自分の子分でもあるかの如くに

待遇した程の敏腕家である、加之、其頭腦の透徹せることは殆んど驚く計りで、常人であつたら一見して倦厭の念を生ずる如き複雑なる場合に際しても、自若として万事を處理して行く手腕といふものは、實に人をして敬服せしむるに足るので、五代友厚といふ名は、稀代の傑物として傳唱せられる程であつた、それ程の富豪で、其程の敏腕を有しながら、五代氏の死後、誰あつて五代友厚といふものもない、其名聲は恰も煙草の如く次第に消滅して、最早今日では、五代友厚といふ名は事業家の間に記憶だにせられぬ、これは、五代氏が時世に遭はないのか、但し他に原因があるかといふに、實は五代友厚其人は、其敏腕を己れ一身の利益の爲に揮つて、曾つて國家の經營に寄與する所がなかつたからである、所謂、自己あるを知つて、國家あることを知らなかつた、更に換言すると、愛國の精神に乏しかつたのである。

古諺曰ふあり、虎は死して革を殘し、人は死して名を遺す、と、若し人にして、死して唄はるゝの名なくむば、其禽獸草木と異なるの點は那邊ぞ、吁、五代友厚氏は商人、事業家として、人に卓越せるの敏腕を有するにも拘はらず、一度棺を蓋ふては、人の傳唱するものなし、これをかの希世の英傑として、國人の欽慕する岩崎彌太郎氏と相對比せば如何、兩者共に其手腕に於て、大なる軒輊あるを見ずと雖も、前者は精神を自己の事業に注入し、後者は國家的事業に傾斜す、これ岩崎氏の遙かに五代氏に優る所以にして、亦、國人の擧げて岩崎氏を欽慕する所因なりとす。

第五　安田善次郎氏

方今我國金融社會の領袖として、最も大なる勢力を金融の上に有する人は、日本銀行創立者の一人であつて、數多の國立銀行の頭取、私立銀行の行主たる安田善次郎其人である、而して氏の最も衆多の人に勝れて居る點といふのは、社會に有益なる大事業と見れば、進むで資本を供給して、其事業を幫助する事である、其例證は、大阪市の築港公債を一手に引受けたる如き、田中長兵衛氏を助けて、釜石鐵山の事業を完成せしめたるが如き、雨宮敬次郎氏を助けて甲武鐵道の整理を逐行したるが如き、孰れも他の資本家が損益の如何を怖れて、危疑逡巡する事をも、氏は平然として之れを決行する、これ實に氏の長所であつて、亦、氏が國家的觀念あるの故を以て、朝野に其名聲嘖々たるの一原因である。

氏は銀行界の王たると共に、實に事業界に於ける旗頭である、が、氏の如く秩序的に、漸進的の主義を採り、加も蒙膽勇斷、事に當つて敢て既往を省みざるなど、誠に文明國の事業家として完全なる人物は尠いのである、同氏の略歴を聞くに、

氏は、天保九年十月越中富山に生れ、安政元年十九歳の時一兩の旅費を懐中して東上したので、別に先祖傳來の家産あるでもなく、さりとて、投機的事業に從事した理由でもない、其名を擧げ、産を興したのは慶應二年、恰度氏が廿九歳の時、日本橋區小舟町三丁目即ち今の安田銀行の所在地に兩替店を開いたのが抑々で、本年六十一歳まで、拮据經營の結果、今日の幾千萬の資産を作成せられたのである殊に氏は、他の富豪なる事業家の如に、戰爭だの、變災だ

の、或は不可思議の機會に乘じ、一躍し巨萬の富を爲したものでなくつて、只一圓の旅費より、細心と大膽とを巧に應用して、極秩序的に、極普通的に、勤勉の功を積み、而して機に臨むでは、其決斷の速かなる、其直進勇猛なる、實に平常の安田氏と別人の觀がある、故に吾人は、岩崎氏よりも、澁澤氏よりも、寧ろ安田善次郎氏を多とするものである。

一兩の旅費を腹卷に入れし北陸の一少年、一度、東都紅塵の巷に來つて、拮据黽勉、終に巨万の富を致す、吁、忍耐と勤勉は、誠に成功の母なる哉

第六　雨宮敬次郎氏の談話の一節

言少しく奇に亘り、語氣極端に走るの感なきにあらずと雖も現時事業家として、有名なる兩散氏の語る處、奇言以て舊商

八が頂門の一針として味ふに足るべし、

世の中に隨分實業上の問題を彼是云ふ者があるが、其内に千圓の金を儲けて千圓の金を損したものは殆んどない。金を儲ける骨折と、金を損する苦しさを經驗しないものが、何んで實業論が出來るものか、丁度沈んだり、水を呑んだりする苦しさを知らずに、遊泳術を講義する畠水練家と好一對だ、

己は何時も獨りで、三井岩崎は例外として、獨力で千万圓の金を儲けて、千万圓の金を損したものは、己の外にはないと思つて居る、己が牢から出たのち、確かに夫丈の事はやつて居る、

己を世の中では大山師の親玉だと、一も二もなく其日〳〵の榮華に耽るゼロッキのやうに思ふものがあるが、己の考

は決して生前の榮耀でない、全く一事業を殘して死にたいと思ふ一片の心があるからだ、己の目的は如何しても日本の製鐵業をして、一大富源となさしめ、世を益し、國を富ましめやうと云ふのである。

而して己の處世の方便といふのは、借錢をするといふことだ、全体、我國の商人が借錢に對する觀念は、兎角債權者に頭が上らぬといふに過ぎない、併し之れは債權者に頭の上らぬやうな金を借るのが惡いので、或は自分の贅澤費だとか、或は妾の給金だとか云ふやうなものを借りたなら債權者に頭が上らぬやうなことがあるかも知れぬが、營業資本の借金は、債務者は即ち債權者の大事なお華主樣で、盆正月には銀行から債務者の處へ贈物を持て來る位である。然るに我商人は一向に智惠のない者ばかりで、少し金が儲かると、直に株券や、公債を買込むで、引込み思案を起すものが多い、それでない者も、金の千圓も貯ると金貸を始める、つまり金を貸すには骨も折れず、智惠も要らないからである、だから我商業界は銀行でなければ高利貸であつて、誰一人永遠の國利民福を打算して事業を興すものはない。

第七　石黑男の家事談

事業家にあらずと雖も、其言ふ所、語る所を玩味する時は大に新商人が參考の一助となり、稗益する所尠少にあらざれば茲に掲出す、

惣じて托者は一家を治めるのに、いつ何時官俸に離れても亦、免官されても、差支のないやうに質素儉約を旨として居る、然し世間の人の如に、待合や、料理屋で幅を利かす

ことが出來ぬ代り、知人の災厄を救つてやつたり、又官位相當の交際、殊には外國人の來訪者などに對しては、相當に軍醫總監だの、男爵だの、体面を保つて來た、而してそれを、今日の家資で立通すには、平生頗る質素にしないと借金を支拂はなければならぬ、拙者は始終さう思ふ、借金と黴毒はどうか子孫に傳へたくない、

借金と梅毒、誠に恐るべし、石黑男の金言、宜しく家政の上に就いて、常に胸裡これを忘るゝなくむば、大なる過失なかるべし、

第八　貯蓄家と讀書家

（加藤文學博士の説）

文學博士加藤弘之氏曰く、

貯蓄家と讀書家とは、其性質に於て甚だ好く相似たるものなり、貯蓄家は一に守錢奴と稱するものにして、讀書家は亦字引學者の綽名を與ふべき者なり、金錢を貯蓄して、是を自身一個の爲めのみならず、公益例へば、學校を立てるとか、或は工業を起すとか、病院を設くるとか、慈善に用ゐるとか、凡て社會國家に有益なる事業に使用すれば、これ貯蓄の眞成なる目的を遂げたるものにして、又、利己心の最も高尚なるものに合することなれば、自己の眞の愉快は洵に深大なるものなり、西洋には金錢を貯蓄し、之れを社會の利益に使用して、大快樂を買ふ人頗る多しと雖も、我國に於ては此種の金滿家甚だ少なし、豈恥づべきにあらすや、

然り、誠に恥づべきの事なり、世の商工諸子、徒らに蓄財をのみ力めずして、大に公益を計るあらば、新世紀の商人とし

で遜色なかるべし

第九　立志要訣

男子志を立てゝ鄉關を出づ、業若し成らずんば死すとも歸らず、とは、學生が笈を負ふて、遊學の途に上る者を奮勵せしめたるの語なり、然れども、其鄉關を出ると、出さるに拘はらず、男子志を立てゝ、若し成らずんば、須らく慚愧自ら悔ひて、具に失敗の跡を鑑み、將來の趨勢を計りて、堅忍不拔飽迄其素志を貫徹すべきなり、かの、失敗に落膽して、再び難關を超ゆるの勇なきは、以て新世界の事業家なるべからず以て、新日本の商工たるべからざるなり、

商工業家は、かの科學者の如く、仔細に研讃するの頭腦を要せずと雖も、堅忍不拔の氣を養成せざるべからず、勤儉の美德を具へざるべからず、事に當つて勇猛突進、盤根を打破するの概なかる可らず、然らずして、徒らに新世紀の商人を以て任せんとするも、社會の許さざるを如何せん、

不能の二字は愚人の字書にあるのみとは、佛の英帝那翁の絶叫したる語ならずや、されば、こそ、彼れはコルシカの半島より起り、白面の書生一躍して、帝位に上り終に歐州の全土を震慴す、元より機會の乘ずるものありたりとは云へ、那翁が强膽不拔の精神は、能く此大業を成就せしめたるものなり、

我れに資金なしと嘯つ勿れ、幾万の資本は天より降れり、我れに機會なしと悔む勿れ、幾多の機會は、泉の水に於ける如く地より湧けり、只、これを攫取するの巧拙あるのみ。

商は富國の基にして、又一國文明の原動力なる、故に商人の勉不勉は、及ぼしては國家貧富の別るゝ所なり、吁、今後の世界壇上に、富を爭はんとする商工の責務又重大なりといふべし。

後編、記する處の致富要訣は、即ち新日本の商人たらんとする者が、名を擧げ、志を立て、以て財を蓄ふるの方法を講じたるもの、幸に熟讀玩味せば、或は思半に過るものあらん。

明治三拾四年六月一日印刷
仝　年六月九日發行

複製不許

東京市日本橋區馬喰町二丁目九番地
編輯兼發行者　荒川こま
東京市本所區相生町三丁目六番地
印刷人　木村文藏
東京市本所區相生町三丁目六番地
印刷所　江東印刷株式會社
東京市日本橋區馬喰町二丁目九番地
發行所　錦耕堂

市岡正一君編　高等紙質和紙製美本

大全字林玉篇

全一冊

（正價金壹圓三拾錢
郵稅六錢）

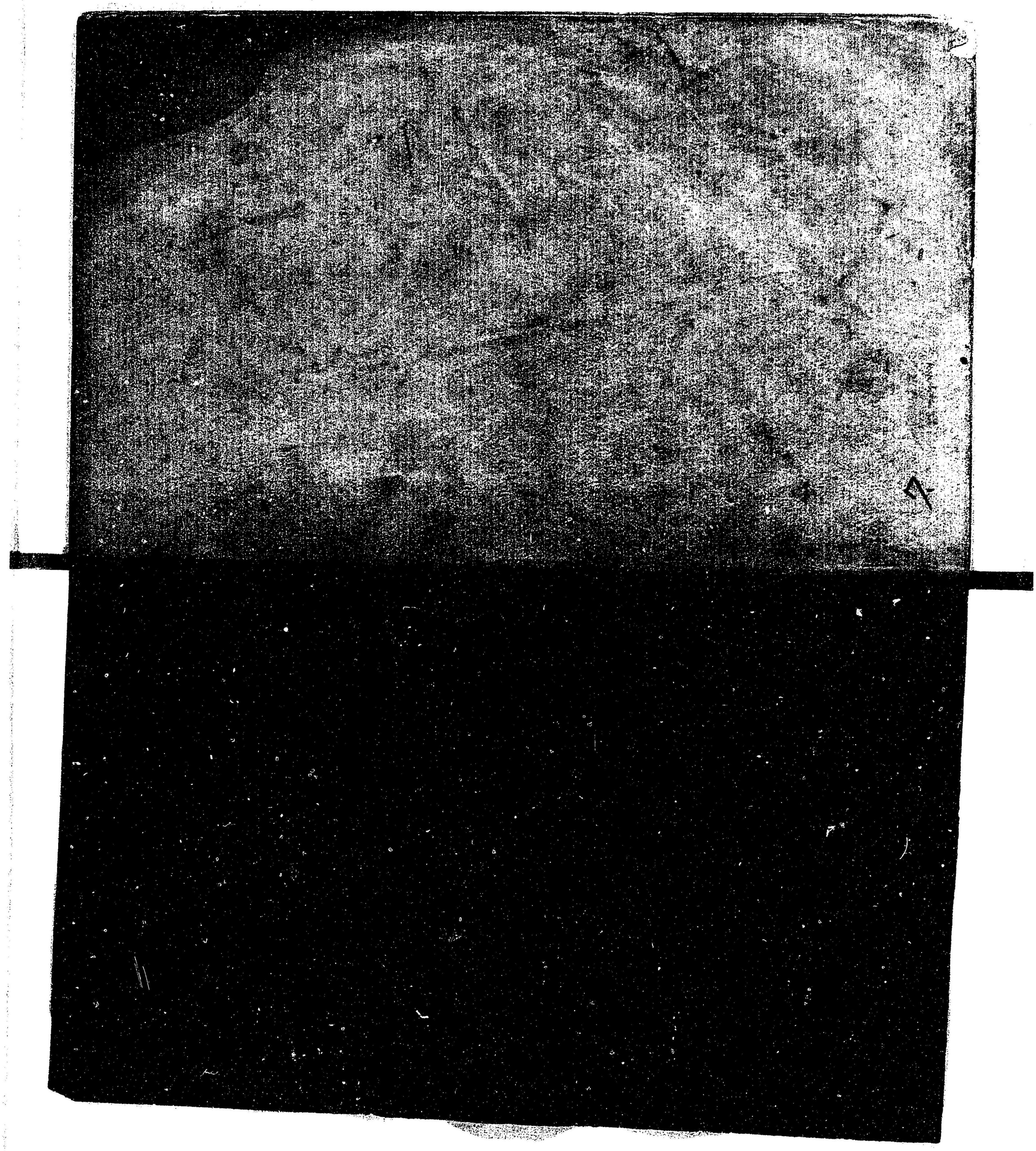
若林勘助君編　高等紙質和紙製美本

明治字林玉篇

全二冊

（正價金九拾錢
郵稅六錢）

近來文學の隆盛と共に月に日に字林玉篇の上梓するもの頗る多しと雖ども皆一として其完を盡し其の全きを致すもの少なく幸に偶々一二のなきにあらずと雖ども其價格廉ならざる也其の價格廉にして完全なるを望むは實に暗夜に星を求むるが如し茲に於てか弊堂是れを憂ひ市岡正一君に請ふて大全字林玉篇を若林勘助君に請ふて明治字林玉篇の二書を上梓する所以なり乞ふ大方の諸彦幸に弊堂の微衷を察し此の低廉にして完全なる二書を購ひ以て學海を渡航するの羅針盤となし或は以て机上の友となさん事を



P8
143

041881-000-8

88-143

実業立志要訣

荒川 こま／編

M34

BDI-0517